一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）1191
株式会社 大東社
電話一宮（62）1168

卒業おめでとう

感謝の気持ちを忘れずに

校長 井中 宏史

創立20周年の記念誌をめくっていたら、定時制4回生の作文を見つけました。

「働きながら県立高校卒の資格が取れる」「夜間でなく昼間学べる」という言葉に、大きな夢と希望を抱いて故郷の種子島を離れました。（中略）職場で、寮で、学校で、複雑な人間関係のなか、食事の時間さえ削って学業を続けることがつらくないはずはないのです。「時間が欲しい」「仕事がきつい」「ゆっくり眠りたい」と口ぐせになってしまった言葉。（中略）卒業式の日、父から「ソツギョウオメデトウ」の祝電をもらって涙を流したあの感動は一生忘れることができません。

西高の歴史のなかには、こんな先輩たちも大勢いるのです。祝電どころか、会社を休んで両親で卒業式に出席してくださる家庭もあることでしょう。何と幸せなことか。

私たちが高校生活を精一杯送ることは、自分のためだけではありません。高校生活だけに専念すれば良い身分の今の生徒たちが、学業の手を抜いているとすれば、社会へ出て、家族はもちろん、日本の高齢化社会を支えていく立場になったときに、果たして本当に役に立つ人となれるのでしょうか。

感謝の気持ちを忘れるなということは、世話になった人にお礼を言えということではなく、自分のやれる精一杯のことをやりなさいということです。親や先輩の願いは、無言の感謝の気持ちが受け継がれ、自分の子や孫の世代が幸せになることです。人はいずれ亡くなります。そのときに、感謝のバトンを私はちゃんと受け継いだ、そして、次の世代にちゃんと渡したぞと言えるように。

今君たちに、たくさんの見えないバトンが渡されました。しっかりと受け取ってください。

卒業、おめでとう。

行動の基準

3年学年主任 大谷 弘直

卒業おめでとうございます。3年生の門出を心から祝福します。君たちは創立50年の節目に入学してきました。この西高での生活はどうだったでしょうか。授業、部活動、学校行事など、どれをとっても西高ならではの経験を積むことができました。そこでは多くの思い出と仲間という宝物を得ることができました。このことは君たちが頑張ってきたからであることは言うまでもありませんが、多くの人に支えられてきたことも忘れてはいけません。今までは、先人が築いた路線、伝統を受け継ぐことで、大きな失敗や挫折をすることが少なかったのではないかと思うのです。

私が教員になってからの20年間は、電話、テレビ、写真など、まさにアナログ化からデジタル化への変化の時代でした。これからも更に変化が続いていきます。そんな中、希望を持って未来を切り開いていくためには、直面する様々な課題に一つ一つ対応しなくてはなりません。「誰かがしてくれるだろう」から「自分がする」へと意識の変化が求められます。今後、壁にぶつかり苦しむこともあるでしょう。そんな時、起き上がり続けるという強い気持ちが大切です。もしそれが自分で解決できる悩みなら諦めないことです。

しかし、これからの人生において、何とかしたくても、何ともならないことがあるかもしれません。そんな時が最も苦しいと思います。そんな中でも、もしベストな方法が無いならば、ベターな選択は何なのかを考え、行動しなくてはならないのです。

そこでの行動の基準は何なのでしょうか。論語の一節に「己の欲せざる所、人に施すことなかれ」とあります。自分が大切であるのと同様に、他人も大切であり、互いに尊重し合うことではないかと思います。想像力を高め、自分が与えられてきたことを、他の人にも与えられる人になってください。今後の益々の活躍を祈念しています。

教科書・補助教材・一般書籍・雑誌
文具・事務用品・家具・教材
松清本店
稲沢市高御堂1-2-1
電話 0587-32-0048
FAX 0587-21-7419

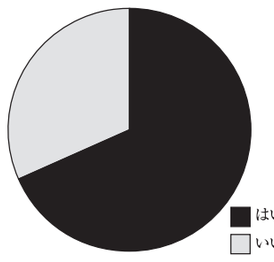
特集 世界へ羽ばたけ西高生
留学意識調査

皆さんは『留学』について考えたことはありますか？最近は『オトナ留学』といって芸能人だけでなく、一般の人も大人になってから留学するなんてケースも増えているみたいですね。今回はそんな留学についてのアンケートを取ってみました。ご協力いただいたのは1年1、2組、2年1、3組の皆さんです。

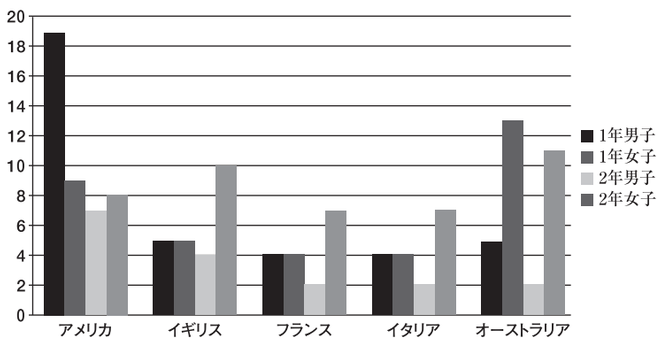
◆留学してみたい？

まず、最初の質問は「留学をしてみたいと思うか」。これは、「はい」と答えた人が圧倒的に多かったですね。「いいえ」と答えた人の理由には、外国人とうまくコミュニケーションがとれるかどうか不安だから、旅行くらいならいいかもしれないが、一定期間留まるとなるときついものがあるから、飛行機が怖いからなどがありました。確かに海外で生活するとなると、人とのコミュニケーションが上手くとれなければ日本以上に大変ですからね。行きたくないと思っている人たちの多くは、海外での生活を不安に思っていることが分かりました。興味がないからとか、行く必要がないからという理由

留学してみたい？



どこに留学してみたい？



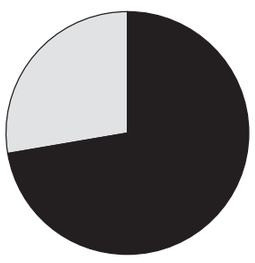
◆どこへ留学したい？

次は、「どこへ留学したいか」。一番人気はやはりアメリカ。次点でオーストラリア、イギリス。やはり留学といえばこのあたりの国でしょうか。英語を学ぶのには最適な国ですからね。他には、カナダ、スペイン、スイスなどが挙がっていました。

◆短期？長期？

そして、「留学するなら短期（月単位）長期（年単位）のどちらがいいか」。これは、短期という答えが多かったです。なかでも、留学してみたくないと答えた人に「短期」という答えが多く見られました。確かに長期ともなると、いろいろな心配事も増えるでしょう。

短期？長期？



◆何が心配？

「留学するなら、何が心配か」。圧倒的に多かったのは、治安と言語です。最近はかなり物騒な事件が海外で起こったりしていますし、やはり前者は気になるところ。勉強しに行くのですから、まずは安全な生活環境が整っていることが一番でしょう。言語もやはり不安ですよね。これは前者と繋がるところがあるのではないでしょうか。言葉のあまり通じないような国で危険な目に遭うなんて想像しただけでぞっとしますね。

また、ホームシックになりそう、食事が口に合うか心配、金銭面の問題などという答えも見受けられました。海外での生活にうまく適応できるかどうかというのはかなり重要ですよね。金銭面もやはり大きな問題。最近では、国際学生証なるものを提示すると海外でも学割が活用できるとか、サポートも増えてきているようですが、留学費用を安く抑えるのはかなり難しそうですね。

◆何を学びたい？

最後に、「留学先で何を学びたいか」。留学先の文化、言語などスタンダードな回答に加え、料理を学びたいと答えるような人も。進路に関わってくるからなのでしょうか。なんにせよ学びたいものが何かあるというのは立派ですよね。

◆まとめ

今回は留学をテーマに特集してみましたが、どうだったでしょうか。この記事が皆さんの留学について考えるきっかけとなれば幸いです。次の留学生インタビュー記事もぜひ読んでみてくださいね。

（木全）

部員感想

＊留学するなら外国でしかできないことがしたい。銃とかもさわってみたいな～。行くなら絶対スイス。多言語社会LOVE!!　（足立）

＊私は留学できるものならしてみたい派です。言葉とか文化とか不安はもちろんありますが、行けば何とかなるような気がするので。今回留学したいと答えてくれた人の中にも、私みたいな人がいるんじゃないでしょうか。（木全）

＊留学に対して意識が高い人が多いみたいだが、不安が多くて踏み切れない人が多そうです。個人的には興味はあるけど、言葉が通じないのが怖いです。（高橋）

留学生にインタビュー!!

みなさんは今、この西高に留学してきている子がいることをご存知ですか？去年の8月から日本に滞在していて、今は1年5組に所属しているその子。今回は、私たち新聞部がずっとインタビューさせてもらいたいと思っていた、アナさんにインタビューしてきました。

●アナさんのPROFILE
名前：アナ　出身地：メキシコ　年齢：17歳　趣味：読書、物理学

●Q&A

Q1．なぜ日本に留学しようと思ったの？

A．日本が好きで、日本語をもっと学びたいと思ったから。自分のことをもっと知りたいと思ったから。

Q2．将来どんな職業に就きたい？

A．物理学者、作家

Q3．西高祭の感想は？

A．生徒皆が何から何まで全部つくり上げているのに驚いた。メキシコの自分が通っていた学校では、学校行事は少ないし、西高のような学校祭を開くのは難しいと思う。

Q4．西高の授業の感想は？

A．楽しいのは英語。全部分かるから(笑)。一番難しいのはやっぱり国語。日本語は難しい。興味が持てるのは物理。これも日本語で学ぶのは難しいけど。あと、数学の授業では全て手計算でやっているのに驚いた。メキシコでは電卓を使って計算することもあるのに……。

Q5．日本の高校生を見てどう思う？

A．ときどき子供みたい。(アナは17歳なので本当は高2の年齢。年下の子と日々過ごしているので余計そう思うのかも)でも、みんな優しい。

Q6．和食で1番好きなのは？

A．白米！(即答されました)

Q7．日本の文化で驚いたことは？

A．男女がはっきり分かれていること。教室でも男女の間に距離があって、あまり仲が良いように見えない。メキシコではあまり男女が分かれていることがない。性別に関係なくわいわいやっている感じ。

Q8．他には……

A．日本では、クリスマスより正月の方が盛大に祝われていると思った。メキシコのクリスマスでは、パーティを渡り歩いたりするので、日本でそういうことができなかったのは寂しかった。あと、日本に来たからには桜が見たい。

みなさんは、このインタビューを聞いてどう思いましたか？ちなみにアナさんは留学を皆に勧めたいとのことです。インタビューの依頼を快く引き受けてくれたアナさん、本当にありがとうございました。そして、インタビューを務めてくれた同じクラスのIさん。あなたがいなければ、このインタビューは成り立ちませんでした。本当に感謝です。（木全）

論説 今の世の中

最近、テレビでニュースを見ていたりすると気になることがいくつかある。冬に特に多く見かける事故に、バス事故がある。一度に多くの人を乗せて走るバスが事故に遭えばその分だけ被害が大きくなる。死者や負傷者が増えれば増えるだけテレビで放送される回数も多くなる。尊い命を失った遺族のことを思うとやりきれないが、事故の原因の方にも目がいってしまう。

1月にスキーツアーバスの事故があったが、関係者の話はどこか要領を得ず、情報の統一や安全確認に時間やお金を使うことをとても渋った経営をしていたことが分かる。利用者の増加に対応しなければならないのは利益を生み出すために必要なのだろうし、競争が激しくてどれだけ安く売り出すかが焦点になっているのだろうが、運営する側も分かっているのにわざわざ危険な道を選ぶ。ともあれ、今の日本では安くて安全を求める消費者と、二つを同時に満たすのが難しいと知って、安さ、つまり利益を削った企業と客を出来る限り増やして利益を上げようとした企業に分けられるだろう。ただし、語弊があるかもしれないが、後者にもいたしかたなくそうしている企業もある。もちろん命と金を比較するという発想自体間違っているのだが、それでもそういう企業にも働いて給料をもらい、家族を養っている人もいる。給料を減らしてでも客の命を助けるか、給料を上げて従業員とその家族を助けるか、これは安易に答えを出してはいけない問題である。

議員や芸能人の横領、失言の発覚は異常なほどである。これは明るみに出なかっただけで昔からあったものだと思われる。インターネットの普及やそれを使用できる人の急速な増加で、それらはすぐに大事となる。インターネットの強みであり弱みであるのは、その速さと情報を残せる人の多さである。速さは、情報の共有に関しては非常に便利である。が、たくさんの人が情報を残せるのは、間違った情報が出る事もあり、さらに速いということは、その間違いが間違いと認識されないまま人々の脳に刷り込まれる割合も高くなるということである。当事者たちがそれを認識した時には時すでに遅しというわけである。

議員に限らず、人を選ぶという動作は少なからず選んだ側にも責任が生じる。選ばれるためにズルはしてはいけないし、期待に応えるためのズルもしてはいけないが、選んだ側からは、一方的に結果を残せと迫られている。そこのバランスがとれる人を見極め選ぶのが選ぶ側の責務だろう。と言っても、見極めるなんて容易なことではないし、それが不十分なまま選ぶ人が少なからずいるからこそニュースになるのだろう。ただ、選ぶ側からすれば相手は人で行動は予測できず、勝手にやってるだけ、なのだ。

少し話は逸れるが、このようなニュースは報道される頻度が高いので、我々は徐々に慣れていってしまっている気がする。このままではそういうことが起きて当たり前と、無意識のうちに思ってしまいそうで怖い。

最近のニュースの中にISのこともあるが、ふと、思ったのは、ゲームにFPSやTPSなどの銃や剣などが登場するものがあり、ラノベの中にも武器を持って対決するという展開はよく目にする。どちらも個人的にはやったり読んだりして楽しんでいるので、一概には言えないことは分かっているが、フィクションであると分かっていても、血や銃、剣をなどの単語に対する畏怖が薄れていっている気がする。これも慣れの一種ではないだろうか。慣れとは人にこっそりと忍び寄る。人としても社会的にも恐ろしい存在である。

学生の自殺が最も増えるのは冬の受験を控えた頃らしい。高校生であれば、センター試験がうまくいかずに電車に飛び込む、という話もある。確かに周りからの期待は重いし、落ちたらどうしようという不安もあるし、勉強したくないし、と思うものである。それでも一時の気の迷いで自ら命を絶つというのはあってはならないことである。どれだけ未来に希望がなくても、生きる意味を見失っても、無慈悲にも人は生きていかなくてならないのだ。おかしな世の中だと思って笑って過ごせたらそれでいい。

ここまでニュースという話題から話を膨らませてみたが、何とも言えない気持ち悪さがある世の中である。そういえば、東日本大震災から早五年である。どこか、終わった話のように考えられているような気がするが、原発の廃炉や放射線の問題はいまだに健在である。せっかく人は学んだり考えたりすることができるのだから、それを最大限生かして生活すれば、今より少しだけ明るい未来を思うことができるのではないだろうか。

（高橋）

作

▼「顔も見たくなかったんです。」▼そう語ったのはダウン症の子を持つ母。『ダンスチームラブジャンクス―ダウン症のある子たちと共に―』牧野アンナ著）しかしダウン症の子でしか味わえない楽しさもあるということに気づく親たちもいる。我が子が普通の子と違うことにはじめは絶望していた。それを不幸だと感じたが、普通の子とは違うことを今はむしろ誇らしく、幸せに思っている。こんなステキな子でよかった、と。彼女たちはきっと傷つきながらも決して楽に流れようとはせず、子供に向き合い続けたのだろう。幸と不幸は表裏一体なのかもしれない。▼メディアを賑わした五輪エンブレムぱくり問題。佐野さんのつくったマークが2020年東京オリンピックのエンブレムに決まったが、ギリシャの劇場のロゴに似ているという指摘が起こった。疑惑を完全否定したが、最終的にそのロゴの使用は取りやめになった。▼五輪エンブレムに決定したときは一躍時の人となった佐野さん。しかしその喜びもつかの間、彼の制作人生は暗転した。もしエンブレムに選ばれていなかったらその後もイラストレーターとして活躍していたかもしれない。▼しかしこんな転落を招いたのも彼自身だ。情報の取り扱い方や著作権問題に対してルーズなところがあったのだ。似ているロゴが他にないか調べたり、画像の使用許可を求めたりする手間を惜しんだのだろう。その怠惰な選択が幸を逃がした。▼私たちは日々選択をして生きている。人生は選択の集まりだ。しかし中には自分の選択を後悔している人もいるだろう。「本当は理系に行きたかったのに、先生に言われたから文系にしてしまった。こんなはずじゃなかったのに。」とぶつくさ言っている人がいる。「でも決めたのは自分でしょ。」といつも私は思う。▼〝こんなはずじゃなかった〟という言葉は、怠惰だった自分を慰める言葉にしか聞こえない。〝こんなはず〟も〝あんなはず〟も結局は自分が招いたことだ。選択をしたとき、納得し吟味して決めればそんな言葉は出てこない。先生を責めるのはお門違いだ。怠惰で、どうしようもなかった過去の自分を、楽に流れたあの時を責めるべきだ。傷がきっとあなたの誇りになる。人生に正解の方程式なんてない。

（足立）

計量器・OA機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

お米の全国初
地域ブランドに
認定されています。
全国名水百選にえらばれた黒部川の扇状地湧水群の豊富で清らかな水で育まれたお米です。

各種行事・イベント お弁当・おにぎりのご予約承ります！

その他、酢飯・赤飯・五目御飯・シャリ玉・助六寿司・天むす・オードブル等、各種承ります！
運動会、スポーツ大会、子供会、町内会、法要、会議など
様々なシーンにあったお食事をご用意いたします。
おコメの新しい価値を創出し、生活文化の向上に貢献する。
Rice Creation
共和食品
お問い合わせは 0586-69-0001
http://www.group-kyowa.com
株式会社名古屋食糧 給食センター ／ 一宮市萩原町朝宮字神明前37番地

購買で
飲み物を販売しています
自販機の利用もよろしく
笑顔のそばに
MEGMILK
メグミルク君島
46－3362

郷土歴史76
有松 ―歴史染め抜く宿場町―

絞りの街、有松。愛知の特産品である有松絞りは名古屋市緑区有松を中心に生産されている。約400年前ちょうど江戸幕府が開かれて間もない頃、竹田庄九朗によって誕生した。幕府や藩の保護を受け街道一の特産品となり、宿場町である鳴海宿も繁栄した。その繁栄の様子を色濃く残す町並みが現在も保存されていて、市の文化財にも指定されている。そんな有松に今回私たちは取材へ行った。

木枯らしが吹く中、取材は始まった。駅から出ると目の前には異世界が広がっていた。町並み保全に力を入れているだけあって、お店も民家も皆白壁黒瓦でできていた。また、屋根の上では寒ざらしをしている光景もみられた。

有松の町並み

寒ざらしの様子

寒ざらしとは、寒い日に水や風に布をさらして色をいっそうきれいにすることで、干している間も整然と並ぶ布がとってもきれいなのだ。また、有松の場合藍色の布が主流なため、寒ざらしの様子は鯉のぼりのようでもあった。

そんな変わった町並みに胸をときめかせながら有松天満社へ向かった。この天満社は地元で有名な神社で、年末年始は参拝客が大勢訪れるという。社は山の上にあり、そこまで階段を七、80段登った。それを登り切ると、４頭の牛が私たちを出迎えてくれた。牛の多さに目をむいていると、大掃除のため社に来ていた地元の人にきさくに声をかけられた。牛は天満社に祀られている菅原道真にちなんだもので、はじめ1頭だったが地元の人の寄進で4頭になったという。牛の数もそうだが、社の棟の数も8棟と全国屈指の数らしい。他にも〝うそ〟にちなんだ置物やご長寿のご神木について教わった。私たちが驚いたのは奉納のぼりのヒミツ。ごく普通に○○神社とかかれているのぼりと一風違い、それは有松絞りでできていたのだ。これぞ〝おもてなしマインド〟。有松絞りを大切に保護していこうという地元の人の強い意思を感じた。

両側に立てられた有松絞りの奉納のぼり

次に向かったのは有松・鳴海絞り会館。1階はミュージアムショップとなっていて、2階が展示室となっていた。有松絞りの伝統絞り技法は100種類以上もある。波のような模様ができる縫絞り。菱形を組み合わせたような形ができる巻上絞り。水玉模様のような鹿の子絞り。くしゃっとなってとても可愛らしい三浦絞り。朝顔の花のような模様は蜘蛛絞り。ひょろっとしたストライプは柳絞り。そんな美しい絞りを作る工程はすべて手作業で行われている。図案を描きそれを型にほり、絵を布に写す。写された絵に従って糸で布を絞っていく。専業の染屋で染色し、染まったら糸を抜く。熟練した者がやると、糸抜きはとても素早くできるそうだ。最後に手湯のしという加工をすると完成だ。ここまでで約3ヶ月かかるという。

江戸時代から明治にかけては飛ぶように売れていた有松絞り。しかし文明開化の波を受け、着物を着なくなった日本人には見向きもされない時代が続いた。代々絞り職人の家庭でも若い人たちは皆、町を出て行ってしまう。

そんな時代が続いたが、近年また脚光を浴びるようになってきた。地元の人ではないが有松絞りに惚れ込み、職人に弟子入りする人もいるらしい。また、美大生とコラボしてイヤリングなどの作品を手がける職人もいる。また、会館内のある部屋には絞りでできた屏風が飾ってあった。それは、新しい試みをしようと考えた職人さんが集まって1、2年かけて作った超大作。今にも動き出しそうな虎の絵が鹿の子絞りで丁寧に描かれ、とっても堂々としていた。そして、絞り会館で絞り教室や実践をやっていらっしゃる60代の方は「私が一番下っ端。もっといろんな人に魅力を知ってもらって後継者が増えれば。」とおっしゃっていた。

絞り会館を後にした私たちは有松で人気のお店〝寿限無茶屋〟へ。うどんが有名なお店で数々の芸能人も訪れているらしく、壁にはサインがずらりと並んでいた。私が頼んだのはとろろうどん。つゆがしっかりしていてとてもおいしかった。店をでようと席を立った私たちはこで絞りを発見。座布団が白と紫で可愛らしく絞ってあったのだ。実は有松のお店の旗は見る限り全て有松絞りでできていて、私たちはまるで宝を見つけるかのように探して歩いていた。「とことん有松絞りを見てってちょ。」と言われている気がしてほっこりした。

駄菓子屋「きょうか」

最後に向かったのは古い町並みにぴったりの駄菓子屋さん〝きょうか〟。昭和の頃の映画俳優のポスターやレコードが展示されているお店にはたくさんの人が訪れていた。地元の子供たち。私たちのような若い旅行客やご年配の方。「Oh!!DAGASHI!!」と声を上げる外国人旅行客。皆、10円から30円のお菓子を思い思いに選んでいた。昔からの町並みは異世界のように感じていたが、どことなく懐かしい香りがするお店だった。有松はとてもおもてなしの気概に富んだステキなところだ。有松絞りがいろんなところに発見でき、地元の人の絞りへの愛を感じた。

また、6月の第1土・日曜日に開催される絞り祭りでは山車もみられるという。その山車で使われる衣装などももちろん有松絞り。今回発見した〝おもてなしマインド〟がもっと見つけられそうだ。ぜひぜひ有松のどこか懐かしい異世界へ足を運んでみて欲しい。そして、有松を知らない人に〝ぼくらの郷土〟を紹介していただけたらうれしい。

参考資料：有松・鳴海絞り会館パンフレット（有松絞商工協同組合）　（足立）

有松絞りまつり

取材感想 道の記

＊有松はNHKで放送中の「愛おしくて」の舞台になっているそうで、ポスターがいたるところに貼ってありました。文中には書きませんでしたが、熱田神宮にも行きました。有松天満社とでダブルご利益をねらってます。（足立）

＊取材に出かける前にちょうどテレビで有松を旅する番組をたまたま見ていたんですが、実際歩いてみてもとてもいいところでした。有松絞りも街自体にも長い歴史があり、とても魅力的なので皆さんもぜひ行ってみてください。最後の取材旅行となりましたが、とても充実した時間が過ごせました。（木全）

＊伝統的な街並みで、道幅も広く、歩きやすかったです。職人さんたちの腕の早さに驚くばかりでした。街並みの一角にザ・昔ながらの駄菓子屋さんがあり、狭い店内でおばあちゃんが小さい子の相手をしていて、なごみました。（高橋）

MY SCHOOL DAYS
片桐 恵理子 先生

記憶も霞むような遙か昔、私にも高校生と言われる時代があった。振り返って当時の自分を眺めてみると、気恥ずかしいような、いたわしいような思いに駆られる。

私の高校時代はあまり明るいとは言えなかった。西高ほど厳しくはないが、一応進学校にカテゴライズされる学校で、教員は大学の序列や偏差値の話ばかりしていて、生徒はその偏差値を少しでもあげようと汲々としているような空気があった。周囲は、偏差値の高い大学にいくことがその後の人生の幸福を約束してくれるような言い方をしていたけれど、私は心の中で「そんなことで得られる人生の幸福とは一体なんだろう」などということを考えていた。「自分たち生徒は、学校の大学合格者数をあげるための駒に過ぎないのではないか」などと疑ってもいた。要は偏屈な高校生だったのだ。クラスメートや担任が少しでも「上の」大学を目指してヒートアップしていく中、自分はその渦中に身を投ずることもできず、かといってその喧噪から離れて独り超然と我が道をゆくこともできず、中途半端なまま鬱々と日々を過ごしていた。

無限に広がるワンダーランド

そんな私の心のオアシスともいえるものが読書だった。特に古典が好きで、世界文化社の「日本の古典」シリーズ全20巻はボロボロになるまで読んだし、百人一首は歌と作者の周辺を調べられるだけ調べたりした。性格がオタク的なところがあるので、好きな分野はとことん、つまらないことまで調べて悦に入ったりしていた（今でもフランス王妃マリー・アントワネットの無駄に長い正式名がフルで言える）。また、高1の時の英語の先生が独特な教育観の持ち主で、英語の勉強は英語の名文を暗記することに尽きるなどと言って、リンカーンのゲティスバーグの演説（「人民の、人民による、人民のための政治」）やキング牧師のワシントン大行進の演説（「私には夢がある」）の原文を生徒に覚えさせていた。私はさっそく暗記がてらそれらの時代背景に関する本を読み漁り、いっぱしの知的高校生気取りだった。今思い返しても恥ずかしいばかりだ。

ただ、こうしたことはかえって、――文系科目に限るが――模試の偏差値を上げることにつながった。古文などでも、文法や古典単語の意味よりも背景知識の方が文章を読む際のヒントになることがある。文章の意味がおぼろにしかつかめなくても、場面状況や人物関係の知識を手掛かりに内容を推測して、それが的を射ていたことも一再ではなかった。そういう意味では学校の授業も新しい知識が増えるようで楽しく、予習も文系科目は苦にはならなかった。しかしこれが理系科目になると、この姿勢は全く通用せず、おおいに苦しめられた。なにしろ、「微分積分が人生の何に役立つのだろう」などと面倒くさいことを考える生徒だったので、勉強に気が乗らなかったのだ（今ではちゃんと、物理、化学の分野における数学の重要性は認識している。認識だけだが）。結局、理数系科目の伸び悩みが受験プレッシャーを生み、心情的に周囲になじめない孤独感とあいまって、自分がつぶされていくような、ありもしない幻影に怯えていたのが高校時代の私だったといえるだろう。

現在西高の皆を見ていて、追い詰められるように勉強をしている生徒がいることに切ない思いを抱くことがある。勉強というのは、いや究極的には学問というのは、本来的に楽しいものなのだと思う。教科書の古文も、文法や古典単語を身に付けるための具ととれば無味乾燥な「教材」に過ぎないが、文中に現れる、生き生きと躍動する人物の有様や思いを読み取る時、それは自身の人生と深く関わる「文学」となる。学問の世界というのは、探求すればするほど無限の広がりを持つ、想像もしないような事象に満ちたワクワクする世界、まさにワンダーランドなのだと思う。そうした学問の一端も感じ取ることなく、ただ受験技術を身に付けるためだけに勉強するのだとすれば、それはあまりにも虚しいことのように私には思える。またそれでは、せっかく優れた教材を日々学んでいるのにもったいないことだ。西高の一人一人は、「学問する」だけの素質も能力も兼ね備えた恵まれた人たちだ。そのような恵まれた人たちが、苦しみながら勉強する姿を見るのは辛い。だから授業ではできるだけ教材自体の持つ面白さを伝えるような、楽しいものにしたいと思っている。教科書の文章は教員の下手な話術にのせなくとも、それ自体が深い味わいを持つ文学作品だ。そうした文学作品の持つ味わいを忠実に生徒に伝え、楽しんでもらいたい。そんなことを考えながら日々の授業に臨んでいる。臨んではいるのだが、これがまた実際には難しく、理想は遙か彼方に霞んでいるのが現状だ。「言うは易く、行うは難し」を身に沁みて感じる毎日を過ごしている。情けない限りであるが……。

MY SCHOOL DAYS

スピーチ

3年6組 **橋本亜美** さん

「皆さんは月に何回食べ物を捨てていますか。」

こう聞かれて、素直に答える人はおそらくいないでしょう。では、聞き方を変えて、

「皆さんは月に何回食事を残しますか。」

この質問には簡単に答えられるのではないでしょうか。

しかし、この二つの質問は全く同じことを聞いています。食べ物を残すということは、食べ物を捨てる、ということです。私たちが生きている日本において、この「残す＝捨てる」という関係式が意識されていないような気がします。

廃棄率

低すぎる日本の自給率について、私は何度も社会の時間に学びました。「輸入に頼ってばかりの日本」、そんなイメージを皆さんも、持っているのではないでしょうか。一方で、私は、日本の食料廃棄率について学んだことは一度もありません。日本は世界で一番食べ物を捨てています。簡単に言うと、輸入した食料の3分の1の食料を捨てているのです。これは発展途上国の5000万人の年間食料と同じです。つまり、この国は、国民の半分もの人が1年間生活するのに十分な量の食べ物を捨てています。国に食料が足りないと嘆きながら、世界で一番食べ物を捨てている国、それが日本です。どうしてこのような国になってしまったのでしょうか。

私は、今の機械化社会が原因であると考えます。

私は中学生の頃、給食の残飯を見ると心が痛むので、お昼はいつも少し嫌な気分になっていました。しかし、高校ではその気分を味わったことがありません。それは、友達がお弁当を残しているところを見たことがないからです。おそらく、給食は顔の知らない人が作ったものであるのに対し、お弁当は私たちの家族など、知っている人が作ってくれたからでしょう。誰が作ったかを知っていると、食事を残すとき、その人に対する罪悪感が生まれると思います。「自分のために作ってくれたもの」を残すことに抵抗があるからです。しかし、作った人が知らない人、ましてロボットであったなら、状況は異なります。ロボットが作ったのなら、残したところで、作った側は悲しみません。なので、食べる側の罪悪感も生まれません。この、食べ物を作る側と食べる側の関係が薄くなったことが、日本人に廃棄を軽く受け止めさせる要因だと思います。

また、日本人の真面目すぎる性格にも原因があると思います。日本では消費、賞味期限の表示が義務づけられています。私たちの健康を守るためには必要なことではありますが、これがあることによって消費者の手に渡る前に、「期限切れだから売れない」という理由で、まだ食べられるものまでが廃棄されています。期限を守ろうという真面目な姿勢が、何万もの人を養える量の廃棄食料を生む、という皮肉な結果を生んでいるのです。

では、私たちはどうすれば良いのでしょうか。私は別にここで、廃棄率を増やすことになるからダイエットをするな、とか、残すのはもったいないから、期限切れのものでも無理して食べろ、と薦めるつもりではありません。ただ、小さなことを意識すればよいのです。食に対する興味を心の片隅に置くことが、私たちの行動を変えると思います。スーパーの食料品売場を回ってみてください。期限切れ間近のセール品があると思います。そのとき、安くてラッキー、と思うのではなく、あなたが買わなかった残りのセール品がどうなるのだろうか、と興味をもって考えてみてください。そのほとんどの食品がゴミ箱へ向かうとしたら、食に対する意識は変わってくるのではないでしょうか。

日本食はだしのきいた薄口であるところが評価されています。しかし、我々日本人の食への興味はもう少し「濃口」でも良いのではないでしょうか。

思いをこめて予餞会

1月21日、待ちに待った今日この日。今年もまた予餞会が無事開催された。きっと3年生の先輩方だけではなく、送る側である1、2年生の後輩たちもさぞ楽しみにしていたことだろう。言うまでもないと思うが、西高生はこの予餞会という行事にとても熱心に取り組む。そして、なにしろ久しぶりの行事であったのでとても気合いが入るはずだ。今年は去年とは少し違い、合唱2クラス、劇3クラスが選出された。

まず、合唱。1年3、1組。トップバッターはかなり緊張したはずだろうが、素晴らしい歌声で会場を包み込んでくれた。次の合唱優勝クラス1組は、さらに会場を感動でいっぱいにしてくれた。両組とも合唱はもちろんのこと、パフォーマンスでも魅せてくれた。創意工夫が見られて新鮮だった。きっと3年生の先輩方の心にも響いたことだろう。

そして、劇。2年4、5、6組、3クラスそれぞれの個性が溢れていた。オリジナリティのあるもの、流行りを取り入れたもの、ファンタジー要素のあるものとどれもとても魅力的だった。笑えて泣けて……。やはり予選を通過してきただけあって、テーマがしっかりしていると感じた。台本はとても練られていて、観る側からしてもかなり感情が入った。体感時間はとても短く、もっと観ていたかったと感じてしまうほどだった。

また、本選に出場できなかったクラスの思いも、3分間スピーチでしっかり伝わっていたはずだ。3分間という短い時間ながらも、どのクラスも考えに考えたとても楽しいスピーチを披露してくれた。

私たち1、2年生が3年生の先輩方へ感謝と激励の気持ちをしっかりと伝えられた、良い予餞会であった。（木全）

《コメント》

＊生徒会長　倉橋うららさん

合唱2クラス、劇3クラスの予餞会。3分間スピーチでも盛り上げてくれました。少しでも先輩方の励みになっていることを願います。

＊文化委員会委員長　多田晴海さん

予餞会運営に携わることができて、本当に良かったです。楽しい時間をありがとうございました。

合唱優勝クラス　1の1

思いよ　届け　先輩、ありがとう！

劇 優勝クラス　2の6

編集後記

＊いよいよ新聞部卒業です。活動自体は少なかったけれど思い出はたくさんできました!!新聞部入部は〝よかった選択〟だったと思っています。〆切に間に合いそうになくて徹夜でPCに向かった日。旅行はとっても楽しかったです。そして上手く書けなくて泣きながら書いていた時。行事ではたくさん写真も撮ったな～。全部全部私の青春の1ページです。ありがとうございました。（足立）

＊留学についてのアンケート、2年生の理系クラスに頼めば良かった……とアンケート収集してから後悔しました。それはさておき、留学生のアナさんにインタビューできたのはとても良い機会でした。こんなこともうないだろうなって感じです。（木全）

＊遂に1年が過ぎ、先輩方が部活動を終えてしまいます。新2年生の方々、是非、新聞部へ。新入生に新聞部との兼部を勧めてください。お願いします。（高橋）

新聞部部員大募集中！